

奥村三雄著 『平曲譜本の研究』

添田，建治郎
山口大学人文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/12021>

出版情報：語文研究. 57, pp.54-59, 1984-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

(紹介)

奥村三雄著 『平曲譜本の研究』

添 田 建 治 郎

『平曲譜本の研究』は九州大学教授奥村三雄氏の労作である。本書は金田一春彦氏による書評(『国語学』田集)で、「今後ア(以下ア)クトをこのように略す)史に関心をもち人々には、是非参照しなければいけない重要な文献として重きをなすこと確実である」と評されるなど、すでに高い評価を得ている。今更の感は否めないが、粗筋だけでも「紹介」して一読の薦めとしたい。

本書は、中世〜近世期の国語史(ア史を中心にして音韻史も)を、著者の深い洞察力と大胆な論証によって明らかにしていく、近年稀な「科学の書」である。平曲譜本(平家物語を琵琶の間奏に合わせて語る音曲、その発音や旋律を示す為、節ハカセその他の注記を施した本)は、「質量ともに極めて豊富なア資料」であり、「活用語の諸形や付属語の類を含め、諸語形のアを種々の話線的関係の中にとらえることのできる」点で秀れている。「平曲譜本の研究」はそれを俎上にのせ、次々と国語史の事実を解明しつつ70頁余にわたって論述するのである。全体の体裁は概略次の通り、

序説 平曲譜本とその意義
第一編 平曲譜本考

- 第一章 平曲譜本の発達
 - 第二章 平曲譜本各説
 - 第三章 平家正節の研究
 - 第四章 京都大学蔵平曲正節―草稿本正研究の果として
 - 第五章 平家正節の成立事情をめぐって
 - 第六章 一方流譜本の詞章及び節ハカセに関する比較―資料篇
- 第二編 平曲譜本の国語学的研究
- 第一章 ア資料として見た平曲の旋律
 - 第二章 平曲資料に反映したア体系
 - 第三章 節ハカセの研究
 - 第四章 平曲譜本によるア研究の問題点
 - 第五章 活用とア
 - 第六章 付属語のア
 - 第七章 通時論的に見た平曲資料のア
 - 第八章 ア史料としての意義
 - 第九章 発音注記の研究
- 第三編 平家物語研究と平曲譜本
- 第一章 平家物語テキストとしての平曲譜本
 - 第二章 平曲の詞章と旋律
- 第一編での平曲諸譜本の吟味にはじまって、第二編では、平曲譜本の譜記(節ハカセや発音注記)により中世〜近世期の国語史がどのよう

に明らかにされるかを説き、最終第三編に至って「平家物語研究への寄与」といった文学的な課題にも触れるなど、その言及は多岐にわたっている。しかし、本書の主たる狙いが、あくまでも第二編での「国語史研究」に置かれていることは言うまでもない。

まず第一編は「平曲譜本考」(15頁)である。本編では平曲諸譜本の吟味、即ち、平曲譜本の成立と発達、前田流・波多野流両派における譜本の特徴と差違、平曲諸譜本の系統・先後関係を含めた内容紹介、中心資料に据えた「平家正節」(前田流譜本の集大成)の成立とその性格などが縷々述べられている。重要な指摘が数多いが、中でも、山口県立図書館蔵「秦音曲鈔」(十二巻、二十四冊)をはじめ公にし、それを波多野流平曲譜本の祖と説くあたりの論証にきわめて興味深いものがある。「秦音」の表題があつて「祇王」の句が巻一「我身栄花」の次に置かれていたり、内部徴証でも、詞章が波多野流的でしかも古色を示している、「秦音曲鈔」の白声には譜記がなくみられる個々の譜形も波多野流諸譜本のそれに似ている、「秦音曲鈔」と波多野流諸本の譜記が規則的な対応を示すなど、著者のあげていく根拠は説得力十分である。節ハカセの特異な「秦音曲鈔」は、同文同譜が多い波多野流の中では源流にあたる譜本だとみなすわけである。

本書の巻を第二編「平曲譜本の国語学的研究」(31頁)が占める。本編報告の中心資料は渥美・奥村・尾崎・高井氏編「尾崎家本平家正節」(昭和四十九年大学堂書店)であり、東京大学本平家正節・東京教育大学蔵(現筑波大学蔵)一方流譜本なども随時取り上げられている。この「平曲譜本の国語学的研究」では、音韻史を説くところも少なくないが、主たる狙いは平曲譜本の譜記に基づくア史研究に

置かれている。つまり、後掲第八章「ア史料としての意義」の項にいう、

(一) (平曲譜本は) 中世末〜近世期のア資料というだけでなく、いろいろな意味においてア史関係の文献の不足を補い得る。(33頁)

(二) 漢語アの史的研究は、和語アに比べて著しく後れているが、……平曲資料は、原則として個々の字音声調等にとられる面が少なく、概ね実際の漢語アを反映している点、極めて価値が高い。(37頁)

など様の、「ア資料としての平曲譜本の意義」を具体的に明らかにして、中世〜近世期の国語史を解明せんとするところにあるわけである。全編これ新発見、定説の補訂・裏打ちに満ちてめざましい。

まず、第二章の「平曲資料に反映したア体系」(31頁)では、主要30語にわたる語彙表が示されていて注目される。自立語(名詞や動詞・形容詞)、付属語(助詞や助動詞)各ア型についての吟味が詳細をきわめる。この中には、平曲資料によつてはじめて中世末〜近世期のア型が推定できるような語が数多く含まれており(具体的には第八章の37頁を参照)、語彙表それ自体がきわめて貴重なア史研究上の成果といふべきである。その他、付属語アや活用語の諸活用形が、「多数の語について、前接自立語アとの接続関係に配慮し、終止形以外のアをも対象」として考察され、方法的にも秀れた帰納法が採られている。本編研究により、ようやくにして京都の中世末〜近世期のアが体系的に整理された、といつても過言ではあるまいと思う。なお、このア語彙表の裏付けになる「資料編(譜記例)」は、渥美かをる・奥村三雄編著「平家正節の研究」(昭和五十五年大学堂書店)の37頁以降に具体的に掲げられている。

続く第三章の「節ハカセの研究」(37頁)は、「平曲譜本の個々の音譜がどのような旋律を示しアを反映するか」といった、譜記

解釈の問題を取り上げており、右記第二章の前提となるべき考察である。解釈の手順は、「ある語に〔上〕の譜が施されている場合、ア反映度が高いと目される白声・口説などの曲節における同一語の数多い施譜例を拾い出し、その〔上〕の譜がつねに高音(●)に対応する位置に施されていることを確認して、〔上〕は高音を反映した音譜だと推定する」手法である。そして、それ以外の曲節中にあらわれる〔上〕の譜も高音を映すはずだ、と考えるわけである。本章の末尾には、平曲の旋律が「どの程度に、どのように現実のアを反映しているか」といった、〈旋律とアの関係〉をまとめている。要約すれば、

(1) 一般に音の上がりめは下がりめよりも反映度が低い。(2) 付属語や用言の活用語尾などは名詞などの意義素部分に比し、ア反映度が低い。(3) 一般に文末や句末の部分はア反映度が低い。(4) 三重・中言や歌の類の如き音楽性の著しい曲節は、白声や口説の類に比しア反映度が低い。(315頁)

平曲譜本のア資料としての意義の高さを認めつつも、そのアを反映する度合が一樣に高いわけではないと言っているのである。類似の問題は、続く第四章の「平曲譜本によるア研究の問題点」(323-328頁)でも触れられており、やはりア資料としての平曲譜本の質的な不十分さ・限界(譜記例の不足やアを不完全に反映した譜記の存在)について指摘する。例えば、二拍名詞兩類の第二拍目、一・二拍の動詞為類・来類・着ル類・見ル類の各(●)形(連用形の大部分)などに、いずれも高音(●)を映す譜記が施されているが、それらの譜は本来あるべき下降調のア(○)を映すには不十分である、二拍名詞舟類(○●)型と兩類(○●)型との差が単独語形への譜記をみる限りでは区別できていない、上昇調アにおける連上り型(○●○●)の中に、早上り型(○●○●○●)の音声的変容とみなしうる例が多く含まれている、等々。もちろん、このよ

うなア資料としての質的な不十分さ・限界は、語り物資料には特有のもので、本章ではそれを補い克服する方法―通時論的観点や体系論的観点の導入―が示されている。通時論的観点の導入例をあげれば、

一拍名詞「戸」の譜記例は、概ね「^上推し開け」(324白)、^{上上}推し開け(604橙)の如くであり、付属語接続形の譜記確例が無い為、In類かIn類かの判定が困難視される。(中略)そこでは結局、左記通時論的観点の導入という様な方法によらざるを得ない。即ち「戸」は、名義抄の例「戸・」(●●)観法下(92)や、現在諸方言の姿「⁰⁰」等からして、「おう、昔からずと」●●型(In)だったと考えられる。317頁このあたり、平曲譜本をア資料として存分に有意義ならしめ国語史の解明をめざす著者の執念のようなものが感ぜられる。

第五章の「活用とア」(328-377頁)と第六章「付属語のア」(378-521頁)の二つは、前述第二章の各論にあたるものである。前者の第五章では、中世末〜近世期京都における多数の一〜三拍の動詞・形容詞各類の活用形(ほとんどの活用形・接続型)アが整理され、360〜361・405〜406頁には視覚的な便宜を考えた活用表が作成されていて、体系を理解する上ですこぶる重宝である。「各活用形(○)〜(○)二種のアが平曲譜本で何故そのような形をとるのか」、ア史的な解釈が70頁にわたって記されていく。一例をあげるにとどめるが、

特殊終止形(○)と(○)の区別は、「成る」(221B) || 上ヨ(313ロ・)ベき、成る(221C) || コ×(681ロ・)ベかり」「落つ」(221B) || 上上(5162白・)ベし、攻む(221C) || ウア(225初・)ベかり」など、いわゆる二類動詞にのみ認められるものだが、二類語の特殊形は低平型出自だった為、中世半ば頃のA変化において、次の如く、下接付属語「ベシ」(○●)型と「ベカリ」(○●○)型との差が影響したのである。

| | | | |
|----------|---------------|--|---------------|
| ◎ ベシ接続形 | ○+○●+○●+○●+○● | 来 ^ア 類 | ○+○●+○●+○●+○● |
| ◎ ベカリ接続形 | ○+○●+○●+○●+○● | (72)見ル類・(202)取ル類・(27)受ク ^ア 類 | ○+○●+○●+○●+○● |

(365頁)

のごとくである。本章では、一部に単語(活用語)の史的アをも考察し従来の説への補訂を試みるところがある。例えば、「示す」類の⊙形(ム・ス・ル等の付く形)が⊙⊙をとることを指摘し、四座講式当時の特殊形には●●の他に●○○もあつたとして、「四座講式の研究」(昭和三十九年三省堂)の言う「特殊形」について、なお検討の余地を残したいとしている。

後者の第六章は専ら「付属語のア」について説く。まず注目されるのは、「多数の付属語を対象として、前接自立語との接続関係に配慮した分類・体系化が行われている」点である。助詞は次のように三分類する。



(但頁)

このところ、卓立式は「下降調の後でも高く付く」、従属式は「下降調の後では低く付く」ということか。格助詞「ガ・デ・ト・ニ・ヲ」接続助詞「ガ・ニ・ヲ」係助詞「ハ」などの類は、「高平調や上昇調の自立語の後で高く、下降調のそれには低く付く」ので従属式の●型と認める、といった按配である。前述の第五章「活用形のア」でも同様であったが、分類・体系化の根拠となるべき具体的な譜記例を示すだけでなく、中古末〜中世のア諸資料(日本書紀古写本、古今集声点本、四座講式など)をも駆使したア史的考察が詳しく、教えられるところすこぶる多い。例えば、助詞「ノ」の接尾辞的性格を指摘した記述がある。

⊙単語の山類がすべて○○→●○の変化を起し、川類と合併したのに、単独形と

関係なく、山ノ類の文節が伝統的な●○型を保ったのは、やはり文節山ノ類が単語に準ずる性格を有していた為と考えられる。(中略)手ノ類の●○型も、その中世初期ア○○型からの規則的変化型と見られるが、この場合も、手ガ・手ヲの類が何れも●○型をとるのに、手ノ類がそれら低起式の影響をうけず、伝統的な●○型を保っている点、見逃せまい。やはり「手ノ」という文節全体が単語に準ずる性格をもっていた為であろう。(但頁)

舟類に「ガ、デ」などは高く付くのに「ノ」が低く付いているのも、同様の理由によるという。着眼点・論証の方法・それらによって得られた結論、いずれも見事という他はない。その他、助動詞アの種類を行い、「ス、ル」を接尾語とみる立場や「マシ」の出自を明らかにし、助動詞のア体系を説き活用表にもまとめる、各助動詞での⊙①②の活用形アの差が何故生まれたのかについてア史的な考察を試みる、など貴重な指摘は枚挙にいとまがない。

以上の「活用とア」「付属語のア」に関する考察を経て、いよいよ第七章「通時論的に見た平曲資料のア」(但頁)に言及していく。平曲諸本にはいつ頃の京都アの姿がどのように反映しているのか、これが本章のテーマである。多く中世末〜近世期頃のアが反映していることは動かないが、質的にみれば語り物特有の不均一性も内包されていて、真言宗の論議書である補忘記よりもかえって古い時代のアを映した一面も見出されるという。その根拠としては、手ノ類・舟ノ類での▽・○●▽が補忘記における○▽・○●▽より古いもので、また、複合語の後部成業や付属語のアに卓立式が多くみられること、個々の語ア型式により古い姿が反映している(二拍名詞「」)のアが、補忘記では現代京都と同じ●●だが、平曲諸本では名義と同じ古い●○をとっている……ことなどがあげられている。折声の曲節にその例が多い●●型旋律の解釈も、また重要である。著者は、(イ)●

○なる卓立型表記がいずれも語り物資料の例であり、(四)補忘記の卓立型例が、下巻の論議作品に限られ単語集的な性格の強い上巻にはみられない、(五)平曲譜本の○○○は折声で著しく、ここでは、品詞や語類に関係なく、○○○型をとるべきものすべてが○○○の卓立型表記になっている、などといった現象を指摘して、

その旋律的特性を産んだ要因として、右記「○○○→○○○→○○○」という様な変化の過渡期的存在を想定したい。(中略)平曲譜本の折声類などは、白声や口説より古い旋律的特性が保たれたという事にもなるうか。(37頁)

と言つ、その上で

譜本当時において、折声その他の○○○型が音楽的旋律の特性と見なすべきものだった事は動かない。(37頁)

とされるのである。この点に関しては、「語り物の○○○は○○○
↓○○○なるア変化の過渡期的現象、南北朝時代のアの姿を伝えたもの」とみなす異説(「四座講式の研究」34頁、「国語学」13集87、88頁など)が存する。しかし、○○○の旋律そのものは南北朝時代のアに出たものだとすると、平曲譜本折声の場合には、その音楽的旋律○○○が広く○○○出自語形以外(例えば二拍名詞の第二類や三拍名詞の第三類)にも及んでおり、そうなる、はたして古い南北朝時代のアの「反映」の名に値するものか否か、やはり議論の余地が残る。謡曲の譜本などでは、全曲節に○○○型の旋律が多数あらわれているが、中に少数、ロンギや次第といった曲節での詞章の冒頭や末尾部分に偏って○○○、○○○の旋律があらわれる傾向があつて、そのことがかえつて、多数の○○○は謡曲固有の音楽的旋律であることを教えているかのようである、このことも併せて考えおくべきではあるまいか。

第八章は、平曲譜本に日付けを伴ったア史を語らせるとどのようになるかといった、平曲譜本の「ア史料としての意義」(36)頁を説いて、これまでの考察の総まとめ的な性格をもっている。何といつても、漢語アを体系的に研究して日本語の諸方言ア(とりわけ種系)分派の時期を明らかにした点がめざましい。漢語のアが諸方言和語アの変化によく足並みを揃え、漢語と和語、両者のアの間に「型の対応」現象がみられる点に着目して、「現在のような諸方言アの対立分派は、概ね漢語が談話語として侵透した頃以降に起きた」とみなすわけである。次の説明は実に合理的で、説得力がある、私に要約して示す。

東京語アが現在の如き状態になつて以降に漢語が侵透してきたならば、平曲譜本で○○○型をとる漢語「葦、弟子」の類などは、同じ○○○型の和語「舟、雨」の類と合併して、今日も○○○に行われているはずである。「舟、雨」類だけが○○○で「葦、弟子」の漢語群は○○○、といった東京語アの姿はその点不合理である。(38)頁から

その他、語彙論への言及も数多く筆致は鋭い。例えば、「ノムドノド(喉)」「オホムオン(御)」などの音変化がいつ起きたか、平曲譜本に反映したアの型がその語形変化の時期を教えているといふ。

二拍名詞「咽喉」や接頭語「御」は、平曲資料において、「咽喉」(143世)「御」(20身)「御」(20身)など○○○型をとる故、「咽喉」(143世)「御」(20身)の音変化は、遅くも中世半ば頃(つまり)○○○→○○○の変化が始まった頃)以前に起つたと考えられる。(中略)即ち名義抄では、それぞれ「咽喉」(143世)「御」(20身)「御」(20身)の如き形をとる故、もし、「ノムドノド」や「オホムオン」の変化が右記のア変化より遅かつたならば、当然○○○→○○○(オホムオン)の様な過程をたどつたはずなのである。(38頁)

平曲譜本にみられるA型によって、当該複合語の複合度の緊密化した時期をも推定するといった、平曲譜本がA史研究に寄与する側面についても40頁にわたって記述する。冒頭に本書を「科学の書」と形容したが、特に前述の第七章と本章に強くそのような印象を抱く。国語史の解明をめざす著者の本領がいかに発揮された章というべきである。

第二編の締めくくりは、第九章の「発音注記の研究」(66-67頁)である。これまでの考察は、主として、譜記の中でも旋律を示す節ハカセにAの反映を見出して行ったものであった。第九章では、平曲譜本の発音注記を対象に、その国語音韻史研究への貢献について記述する。本章の考察は、基本的には、「割ル・清ム・詰メル・呑ム等の注記をわざわざ施すのは、譜本当時の中央語がその様な発音でなかった証拠」という考え方に立って行われている。一例をあげてみよう。「割ル」注記が、概ねiu連母音出自形に付されeu連母音のそれには皆無である」点を取り上げて、次のように説くところがある。資(史)料にあらわれた現象の、真実教えるところを読み取つてつとに有名である。

中央語史におけるiu連母音の融合拗長音化は、euの場合と異なり、中世の初期(近世)の間の或時期に起つたのだらう」といふ様な推論を行い得る。即ち、平曲の伝承音と譜本成立当時の中央語との間に差があれば、この様な発音注記は不要と考えられるからである。eu連母音に「割ル」注記がないのは、平曲伝承の初期において、既に拗長音化していた為と言えよう。(61頁)

本章の末尾には、発音注記例が一覧表の形で掲げられ(67-68頁)、謡曲伝書の記述などと相俟って、平曲譜本の音韻史資料としての意義をきわめて高いものにしてている。

本書の結び第三編は、「平家物語研究と平曲譜本」(69-74頁)で

ある。特に、「譜記と語形」「平曲の曲節付けと詞章の性格」の項が印象深い。各詞章への曲節付けの変遷、作曲者による平家物語本文の文学的解釈がどのようなものかといった、平家物語受容史の考察が詳しく、平曲譜本研究の射程の広さを示している。文学を志す向きにも是非一読をお薦めする次第である。

さし当り「那須与一」の句における義経の叱咤の声として、「今度鎌倉をたつて西国へ赴んずる者どもは皆義経が命をば背くべからず」の部分(中略)諸譜本いずれも強声(「背」)になっている。(中略)語頭をオクターヴ低める調子の陰旋法で語られる故、しみじみと愁いを帯びて聞こえる。その為、思いなしか義経の叱咤も、怒りというよりむしろ「お前の辞退する気持も一おうわかるが、しかし」というような調子に響くのである。(後略)(指頁)

『平曲譜本の研究』は、著者二十年の平曲研究が花開いたもの。本書は、平曲譜本のもつ国語史(A史を中心に音韻史も)的な意義を明らかにするとともに、それを質量ともに高からしめて中世近世期の国語史の一層の解明をめざした労作。綿密で具体的、国語史を見通して大胆に切り込む筆致は、最終頁まで読者を魅了して離さない。本書は、中世近世期の国語史研究を大きく前進させた。国語学を学ぶ楽しさと不明な事柄が次々と解き明かされていく論証の手際よさに、心地よい充実感を覚える。著者の口ぐせがしみじみと思い出される。

—国語史はなぜ歴史の教科書に記述されないのでしょうか。

(昭和五十六年五月発行桜楓社刊 三八〇〇〇頁)